

Title	ランケ史學の根柢に對する歴史哲學的一考察
Sub Title	Ranke's principles of history criticized from the standpoint of philosophy of history
Author	神山, 四郎(Koyama, Shiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1952
Jtitle	史学 Vol.25, No.3 (1952.) ,p.142(397)- 166(421)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19520000-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ランケ史學の根柢に對する歴史哲學的一考察

神 山 四 郎

序

十九世紀の初頭から半ばにかけてドイツ思想界は「哲學」と「歴史」が最も接近した時代と云われるが、この時に當つて各々その固有の——時には敵對的な——立場を主張しながらも思想的には緊密な内在關聯を有する二人の名をあけることができる。ヘーゲルとランケ。哲學者ヘーゲルは「理性的なものは現實的、現實的なものは理性的」Was vernünftig ist, das ist wirklich; und was wirklich ist, das ist vernünftig. という命題をかざして抽象的普遍的概念から現實的具體的なものに向い、他方歴史家ランケは具體的なものから出發して究極の實在に「現實的にして精神的なもの」das Real-Geistige を求めて兩者はいわば「歴史的現實」において邂逅交錯する。勿論兩者がそれを追求する認識の方法(quo)は凡そ異なるが、對象的(quod)には同一の存在理據を主張するものと云えよう。こゝにギリシヤ以來根源的に對立分離したまゝで來たヒストリアの道とフィロソフィアの道が少くとも prinzipiell には克服融合されたとも見

られ、その意味でこの二人が近代歴史哲學の成立に寄與した功は大なるものがあるといふことができよう。

然るにその後ヘーゲルの歴史哲學、即ち彼の歴史論理學としての辨證法論理はマルキシズムのいわゆる史的辨證法に
おいて繼承され、その存在基體が倒錯され論理構成が改組されながらも、現下ソヴィエツト哲學界において漸次受けつ
つある哲學的修正において重要な歴史哲學的理論展開を示している。これに對して、ランケの方はどうであらうか。彼
は六十年代の手記において深い確信を以て「普遍的なものに關係付けることは(歴史)研究を少しも侵害しない。前者な
くしては後者は冷却し、後者なくしては前者の把握は妄想に墮す。……批判と客觀的把握と綜合的結合とは協同しうる
ものであり又しなければならぬといふことは今日我々のひとしく一致するところである」と云つてゐるが、彼の死後
半世紀餘を経た今日この問題に關する諸家の歴史哲學的批判解釋はおよそ區々散發的なまゝに、少くともその強力な
理論的展開を見ない。

例えばランケ史學の中核を専らその「理念説」*Ideenlehre*に見てその故にフォン・ベロー、ティッセン等によつて
彼がドイツ・ロマン派の主流に入れられ、或はロータッカーによつて「ドイツ觀念論の最も本質的な形而上學的傾向を示
す」代表的人物とされるかと思えば、ロレンツ、ヒンツェ等によつてその方法の實證性が強調されてランケ史學の近代
的自然科學的性格が高唱される。しかしランプレヒトの如きは彼に宗教的神祕主義者の名を附して單に舊式の歴史家と
して「近代歴史學」の世界から追放してしまおうとする。マイネッケ、ディルタイ等はこれに反對してランケの歴史的
感覺を正に近代歴史主義の理想タイプとして最大の讚辭を惜しまない。しかし又トレルチの如く彼を全面的にヘーゲル
派に屬するものと見て抑々彼に獨自の立場を全く否認するものもあれば、彼を「純粹史家」*der reine Historiker*との

み云つて凡そ「思想家」Denker の名を呈することを拒絶するクロイチェの如き人も⁽⁸⁾いる。或は又ニーブルが彼を「現代のツキヂデス」Thukydides der Gegenwart と呼んでゐるのに對して⁽⁹⁾、ディルタイはヘロドトスの如き「叙事詩人」Epiker と云う⁽¹⁰⁾。結局オンケンのように十九世紀の精神史上においてランケがいかなる特殊の地位を占むべきかは未だ一義的な解答に達してゐないと云うこともできよう⁽¹¹⁾。だが更にクロイチェがその近著においてランケの靜觀主義を「歴史的問題なき歴史記述」Die Geschichtsschreibung ohne historisches Problem として、いわば歴史哲學的關心から一種の棚上げ状態にしてしまつてゐるといふこと(Die Geschichte als Gedanke u. als Tat, 1944) 或はヤスパースによつて現代の實存的な歴史意識から克服さるべき十九世紀的な Totaldenken の一つに彼が數え込まれてゐるといふこと(Vom Ursprung u. Ziel der Geschichte, 1950)等は、少くとも歴史哲學の側面からするランケ批判の現況を物語る一端と見て差支えないと思ふ。

それではその原因がどこにあるのであろうか。勿論これ等各學者のランケ批判が悉く正鵠を得てゐるとは云い難い。就中専門の哲學者にとつては「哲學しようとした時よりも歴史を書いた時の方がよりよく哲學した」と云われる⁽¹²⁾ランケのあの老大な歴史書自體の検討が足りないまゝに多少の誤解を混えてそれがランケの一面的把握であるといふことは充分云える。しかしさりとてそれを個々に論駁辨明して行つても遂に解明しきれぬ何かと残るといふこともまた看過し得ない。結局問題はランケ自身のうちにそのような理論的展開を阻む或る不徹底さがあるのではなからうか。そしてそれが彼の本來の *intentio* といかなる關係にあるのか。それをランケ史學の根柢に探つて前述の諸批判の一面性を修正しつゝランケ史學の全體像を闡明せんとするのが本稿の目的である。

「私はアプリアを放棄しよう、何故なら私のやる推論は一切アポステリオリだから⁽¹³⁾」と彼は云う。この言を手がかりにして我々の推論を進めてみよう。このように彼は先づ第一に己れの立場に根源的にアポステリオリズムを主張する。従つてあの有名な句「本來いかにありしかを示さんのみ」Er will blos zeigen, wie es eigentlich gewesen という命題はランケの第一命題といふことができよう。確かにこれは彼の處女作たる「ローマ的ゲルマン的諸民族史」Geschichten der romanischen u. germanischen Völkerの序文におつて表明されているという機縁からも、又それが彼の歴史觀全體の構造において占める論理的位置からいつてもランケ史學の第一命題といふにふさわしいものである。しかしそれはまた直ちに近代歴史學一般の確立にとつても第一礎石と見らるべきである。その點で近代史學史におけるランケの立場はいう迄もなく極めて重大である。そしてそれは直ちに「我々の課題、それはたゞ對象につくこと⁽¹⁴⁾」という方法的經驗主義となつて表われ、更にそれは「できるなら己れ自身を消し去つて事態のみ語らせたい⁽¹⁵⁾」という、あのマイネッケの云う「禁欲的熱狂」にすらなつて行くのである。かくしてこれによつて獲られた歴史記述の客觀性は「ローマ教皇史」Die römischen Päpste in d. letzt. vier Jahrhundertenの成功によつてヨーロッパ史學界にランケの地歩を不動なものにした。一プロテスタント・ドイツ人としてあれほど積極的に反宗教改革運動 Gegenreformationenを評價し得たこと、又そのためか「かくれカトリック」Krypto-Katholikと云われて故國で相當の非難をあびたということも、反つて史學界に於ける彼の成功を裏書きするものに他ならない。従つて後年の大作「フランス史」Französische Gesch.

chte vornehmlich im 16. u. 17. Jahrhundert や「英國史」Englische Geschichte vornehmlich im 16. u. 17. Jahrhundert においても彼が受けた讚辭が先づ一齊に民族的偏見を脱却しているという點にあつたこと、要するにランケが専門の史學者から口を揃えて賞讚された點が先づこの歴史記述に當つての客觀的な態度にあつたことは史學史上かくれもない事實である。デイルタイは晩年の回想録の中で「私は彼(ランケ)には彼が高齡になつた時はじめて會いました。ですがその當時でもなお彼の印象は壓倒的でした……その大きな蒼い眼は星のように輝いていたが、たゞ客觀的なものに向けられていました」と當時の感動を物語つて¹⁶⁾いる。

しかしこの「客觀性」Objektivitätをも少し分析してみなければならぬ。先づ前述の第一命題の意味する客觀性の概念内實をランケ自身の表述において見てみよう。「人は史學に過去を裁き、未來のために現代を教えるという職務を歸するが、この論文はそのような高尚な職分を果すものではない。それはたゞ本來いかにあつたかを示そうとするだけである。」¹⁷⁾この最後の句を前文と對照してみれば明らかな如く、それが先づ教訓乃至實用的見地から歴史學を切り離すという意味での客觀性であることが容易に分る。「フランス史」の序文においても彼が力説している點は黨派的偏見に傾き易いメモリアル風の記述スタイルを脱せんとする彼の意圖にあるのであつて、彼は「同時代の人が互いに仕合つてゐる告發や、後世の人が屢々する限られた把捉を越えて、根本的に信頼すべき報導によつて大きな事實の客觀的觀察に到達せんとする」¹⁸⁾ことを目標としている。又「英國史」においても「どちらかといえば憲法的立場を固執して政治的 Doctrin に對する示訓又は模範を(英國國民に)求めんとする」¹⁹⁾フランス人の扱い方を批判しつゝ、更に Whig でもなければ Tory でもない自分の中立的立場の故に同國人の史家マコーレイにも劣らぬとひそかに自負する彼であつた。そ

それは結局彼が屢々發してゐる「kein Lob und kein Tadel⁽²⁰⁾」という警告に完全に一致する一種の非黨派的・非實用的 unparteiisch-unpragmatisch 立場を唱導するに他ならない。彼自身も云つてゐる如く Objektivität ist zugleich Unparteilichkeit である。これはライプニッツによつて先驅され、ニーブールによつて根本的に基礎付けられた近代史學の史料批判主義の全面的な繼承、その強力な推進に他ならなかつた。これによつてグイツァルディーニ等いわゆるルネサンス風の叙述スタイルに對して明瞭な一線を劃し得たことは特記されてよい。そのためにこそ彼は處女作と同時に己れの立場を宣明せんとして「近世歴史家批判」Zur Kritik neuerer Geschichtschreiber を發表してゐるのである。

しかし史學的にはそれ程劃期的なこの客觀性もそれを歴史哲學的に見れば單に方法上の客觀主義に止るものであつて、それだけでは歴史認識にとつては未だ準備的態度に止る。従つてこの意味でランケ史學全體の客觀主義的性格を速斷することはできない。それにはもつと根本的に歴史對象に向う彼の認識論的論據においてそれを云い得なければならぬ。その意味でこそ「本來いかにありしかを示さんのみ」という第一命題の歴史哲學的内容が問われるのでなければならぬ。

「事實をそれがある通りに認識し、それに滲透し、それを表現する、これが正しく史學 Historie なのだ⁽²¹⁾」という彼の言は、歴史的对象の客觀的把握という歴史哲學的問題を含んでいと解さなければ意味をなさぬ。それは先づ抽象的には歴史的個體の自主性として表明され、具體的には世界史における各民族、各國家、各時代の個性を第一義的に認めんとする主張となつて表われる。個別は個別自身のために求められるのでなければならぬ。その場合個別の存在理

由を自然主義者の如く「類」の Exemplar として見ることを斥け、又啓蒙主義者の如く前世代を後世代に「隸屬させる」mediatisieren ことも拒否してその自主性の尊嚴をひたすら守る。

併しあれこれの斷片的史實を集めたゞけでは歴史にならない。彼は云う「狭いか廣いかの領域における民族史を寄せ集めたところで世界史にはならない」、歴史家は同時にその眼を普遍に向つて開かなければならない、と。これは彼にとつて重大な提題である。個々の史實の眞を見よというのと比しく、それと全く同程度に重要な提題である。しかしその場合の「普遍」を先づ第一義的には「全體」das Ganze 乃至は「全體の關聯」Zusammenhang des Ganzen として解さなければならぬ。それは個別的な歴史事象間相互に直接の因果系列によつて連鎖される限りでの總體、即ち個の作用契機の統體としてのそれを意味するのでなければならぬ。これが彼の特殊から始まつて普遍に登るといふ意味の普遍である。そしてその意味の普遍であれば彼が前述の個別の自主性の存立に對して守つた客觀主義の態度はそのまゝ保持され得る。その個別の因果關聯乃至相互的作用契機の全體を具體的に世界と云えば、それを對象とする彼の史學が世界史學であつて、しかもその世界史學が彼にとつてはヨーロッパ史學であつたと云われてもそこに矛盾はない。事實彼がギリシヤ・ローマ的中軸に立ちキリスト教ゲルマン的世界に移行展開して行く西歐の歴史を世界史と規定していることは晩年の進講録 (Ueber die Epochen der neueren Geschichte) において歴然としている。これは彼の立つ歴史的

世界と彼の抱く經驗主義的立場からすれば當然の規定であつて、彼はその點で前述の客觀主義を貫くことが勿論できるわけである。

然らば元に戻つてこの歴史的個體即ち個別的な史實を彼はいかに認識したか、この歴史的實在に向つての彼の眞摯な肉迫を更に追つてみよう。彼は歴史的現實に接近して行くと「眞理の世界は假象界に對立している」のが分る、そして「假象界は深みに入つて行けば行くほど益々深い假象を現わし、本質喪失にまで進み行くが、眞理の世界は本質のうちに終る⁽²³⁾」と云う。或はまた「嘗つていかなる國家といえども何らかの精神的基礎と精神的内容をなしに成立したものはない。力そのものにおいて或る精神的な本質が現われ、根源的な Genius が現われる。而もこのものは固有の生命を有して多かれ少かれ特有の條件を充たし、而も一つの作用圏を自ら形成する。歴史 Historie の職務はこの生命の認識にあるのである。……この世界に顯現する精神は自己の存在領域の隅々までも自らの現存をもつて充溢する。この精神の中には偶然的なものは何一つなく、その顯現はあらゆるものうちに基礎づけられる⁽²⁴⁾」と云つている。彼によれば先づ「人類」がその發展の無限の多様性を己れのうちに包藏して、漸次それが各民族、各國家に顯現して來る、そしてそれが顯現して來る時には我々の認識し得ない或る法則に従うもので、それは人間の考えるよりは遙かに神祕的であり偉大であると考へられている。彼にとつて究局の歴史的實在はいわば「人類」の有する一種の普遍的な精神的生命ともいふべきものであつて、それが人間自身或は民族個體の内奥において一つの「力」Kraft (moralische Energie) として發現して來る、その modus が正に歴史と見られているのである。結局ランケにとつて歴史は「精神の表現」に他ならない。そして彼は史學探求の究局の目標を結局この表現を通じてその背後にある「事件の最深の祕密」das tiefste Geheimnis der

Begebenheiten を探らんとするところに置いてゐる。かくしてこゝに彼の考へてゐる歴史的現實というものは實は「事件のかくれたる原因」die verborgene Ursachen der Begebenheiten として働くその眞實在の不可知性を背後に秘めてゐるところの可知的な現象として考へられてゐるようである。これは我々が今迄辿つて來たランタの思惟において新たに遭遇する二元論である。この點でシーモンがその哲學的根據に關して「ランタは溫和なカント主義の空氣を吸つていた⁽²⁵⁾」と云うのであらう。そしてその歴史的實在をより明確に規定して「理念」Idee という時、これは超越的な一種の觀念實在である。しかも更に彼は歴史におけるその理念を規定して、それが明らかに神に發するものと云い、結局歴史は「神の思想」Gedanken Gottes の發現、或は「神の世界支配の計畫」Plan der göttlichen Weltregierung の實現に他ならないという時、それは完全に歴史的因に世界超越性を言表してゐることが明瞭である。彼にとつて歴史的現實は決していわゆる素朴な實在 naive Realität ではない。歴史的存在をこのような形而上學的二元論に立つて考へてゐるとすれば、前述の經驗的方法のみを以てそれを全的に把握し得ないことも亦自明である。そうすれば彼は普遍という概念を一義的に前述の如き個の統體としてのみ云つてゐるのではないことが分らう。それは確かにもう一つのアプリオリな觀念實在としての「普遍」をも言表してゐるのである。従つて又歴史の動因が單に現象相互間の作用契機のうちのみ求められるのではないことも明らかであらう。

然らばこの Idee apriori としての「普遍」、その現象する力としての「動因」をいかにして認識するか。當然彼はそれの「直觀」Intuition を云わなければならぬ。それが彼の歴史認識の形而上學的觀照 metaphysische Anschauung を性格付けるものであり、彼の心裡には後驗的に獲られた現實の世界像の背後に先驗的な理念としてのもう一つの世界

像が直観されなければならないのである。この二つの世界像が重なり合つた次元がまさに彼の歴史的考察の本來の對象なのである。

このように歴史的實在を神的なものに發し普遍的、精神的なものに認めて、いわゆるこの *Idee apriori* が現實に顯現するその現象面が歴史的現實であるとすれば、この存在論のアプリオリズムを前述の方法論のアポステリオリズムと
いかに調和統一すべきか、この問題が當然出て來るわけである。彼はその場合この *Idee apriori* から歴史的事實を「演
繹」することは彼自身にも又他人にも嚴に戒めた。イデエから現實への關係はどこまでも唯「あとからする解釋原理」
nachträgliches Deutungsprinzip に止めらるべきであつて、それをフィヒテの如き純粹な思辨的概念的な演繹とする
ことにも、ヘーゲルの如き歴史の「發見的探求原理」*heuristisches Forschungsprinzip* 乃至構成原理にすることにも終
始反對しつゞけた。⁽²⁶⁾ 彼の生涯をかけての哲學派に對する抗争は實にこの點にかゝつていたのである。然らば彼はその歴
史解釋をいかにしたか。彼はその場合も徹底的に「下から上へ」*von unten nach oben* の方式を固守する。*real* とも
のを通じて *ideell* ともなく、である。即ちどこまでも經驗的操作によつて獲られた史實の眞の上に立つて、それを通じ
てイデエを直観するのである。そこで彼はウィルヘルム・フォン・フンボルトの「豫感」*das Ahnden* という概念を正
に好適なものとして己れの史觀のうちに引き入れるのである。⁽²⁷⁾ 即ち「目的」としてではなく「動因」として歴史のうちに
息吹かれたイデエを事實のあとから追感するのである。その精神的な力を共感するのである。こゝに彼の説のフンボル
ト的な歴史認識論に對する決定的な相似點が見出されるのであつて、この點が彼の史觀の性格が第一義的にフンボルト

的な觀照主義にあると考えられる所以である。

而してこの豫感乃至追感において捉えられるイデエの顯現は具體的に歴史的世界においては個々の民族、國家を通じてその上に見られる時代の「大勢」Tendenz 或は「傾向」Richtung として把握されるのである。そしてこの歴史の Tendenz, Richtung において彼の敘述は始めて動的な特徴を帯びて来る。ランケ史學の Dynamismus はこゝに基礎付けられるのであつて、彼はこの動的な Tendenz 或は時代の「指導的理念」die leitenden Ideen の捉え方においてヘーゲルの論法を採つたのである。普通云われるように彼は一概にヘーゲルに反對してばかりいるのではない。寧ろドイヴェの證言するように彼はニブールの方法とヘーゲルの精神によつてのみ彼の世界史學が完成すると考えていたのである。⁽²⁸⁾ 又彼自身「哲學派と歴史派は世人の云う程反對なものでない」と云つて⁽²⁹⁾いることの意味もこの點にあるのである。ランケの歴史的大勢としてのこの普遍性への傾きは個別への意志と同程度に強いものである。こゝでランケは大きくヘーゲルに傾くのである。ランケにおいて彼の歴史記述のうちに動的把握をなさしめる原理がいかにもヘーゲル風な動(These)、反動(Antithese)及びその統一(Synthese)と⁽³⁰⁾いう三拍子をもつてゐること、又國家の歴史的運命に結束(an sich)と外國との接觸(für sich)と滅亡(an und für sich)の三段階を體驗せしめるところにヘーゲルの敘述とかなりの類似を思わしめる。又“aufheben”という術語を殆どヘーゲル的に用いてゐる個所も多々ある。又民族精神と英雄の關係においてもヘーゲルと殆ど同じ説明を聞くことができる。即ち英雄の純然たる個人的動機による意志遂行において反つて普遍的民族理念の實現がなされて行く、結局自由なる個人の主觀が歴史的世界の客觀と同一になると主張するのである。それから更に國家論において兩者の類似は一層顯著となる。ヘーゲルが國家を世界精神實現の具體

的目的と見た如く、ランケにとつても國家は *real-geistig* なものとして、それにおいて彼の歴史の理念の實現は極點に達する。ジーモン(31)の詳細な比較研究(E. Simon: *Ranke und Hegel*)はこの兩者の相似點を次々に指摘して行く。結局彼の歴史叙述におけるこの「Dynamik 一般の雰圍氣、普遍と特殊の對立を運動の歩みの中に融合させること」、「この Tendenz による統一の「リズムミックな行程」(32)」最も具體的な實在論を最も崇高な精神性に完く結びつけること」など、これらの諸特徴が専らヘーゲル哲學よりのものであることを我々はトレルチと共に認めることができる。確かに「ランケの精神がドイツ史學を今日迄支配している限りは、ドイツ史學はやはり次第に薄れ行き非哲學的になり不安定になり行くヘーゲル精神を以て充たされているのだ」という事實は單にトレルチの個人的見解に止らない。結局それはこの時代一般の思想界においてヘーゲル哲學の影響が斯程までに強力な勢力を獲ち得ていたといふことの證左に他ならない(33)。その意味でランケを「ヘーゲルの理念界に強く刺戟されていることを忘れ、見誤つてはならぬ」と警告してくれるトレルチの言に我々は充分耳を傾けなければならない。

しかしそれはヘーゲルの辨證法的發展という歴史論理の構造自體の方からも考えてみななければならない。ヘーゲルの *Dialektik* は一言でいえば「時間における精神の開陳」*Auslegung des Geistes in der Zeit* に他ならず、少くとも彼がそれを歴史の構成原理として主張した限り、その論理的發展が單なる認識主觀の無時間的な論理行程ではなくて、現在から未來への時間系列に沿つての對象存在自體の發展を意味しているのである。従つて彼の歴史哲學は民族精神の興亡隆替という *aufgehobene Momente* を媒介として世界精神そのものが刻々自己を實現して行くその進展過程を指表するものに他ならない。それをこゝに「前への發展」と云つてみれば、ランケの場合はそれは「後への展望」に止ると云わ

なければならぬ。何となればランケの場合辯證法的論法を用いるといつても、彼はそれをたゞ過去に向つて事件の因果系列を遡るその解釋原理として用いるだけなのであるから。従つて先づその展望の視點が無條件的に定立されるのであつて——いわばこれは展望者にとつて主體的には絶対であつて——そこから「傾向」が過去に向つて遡行的に規定されて行く。そこから壯大な世界史的關聯が手操られ、その歩みの跡に神意をすら讀みとつて行くのである。だから彼は「うしろに向つての豫言者」rickwärtsgewandter Prophet⁽³⁴⁾と云われるのである。それ故ヘーゲル精神にいくら傾いたといつても彼にとつてそれはフンボルト的な觀照主義という全體構造を打破するものではなかつた。フンボルトの據つて立つ哲學的根據たるカント主義と此のヘーゲル哲學の間には實は哲學史的には既に大きな變化逕庭があるのであつて、ヘーゲルの歴史哲學の確立にはこのカント主義の感性界と叡知界、現象界と實在界の二元論克服——即ち彼の「生成的同一」werdende Identität——が根柢になつていたのである。それ故ランケがヘーゲルの論法に依據しながらも結局根本においてはカント主義に基くフンボルト的理念説を出でなかつたといふことは、とりも直さずヘーゲルの精神が實は歴史哲學的には骨抜きになつていたのである。それ故ランケがヘーゲル哲學から決定的影響を受けているにも拘らず反^{アンチ}ヘーゲルを主張することは一種の「忘恩行爲」Undankbarkeit⁽³⁵⁾であると非難するトレルチの見解は、ランケに對するヘーゲルの影響を過大評價しているとしか思えない。結局ランケに對する影響がフンボルトとヘーゲルの何れが大であるかという比重問題になれば——それは極めて微妙な問題ではあるが——筆者はむしろトレルチに反して⁽³⁶⁾フンボルトの方に重さをかける。とに角何れにせよランケにあつてはカント、フンボルトの二元論からヘーゲルの一元論に至る哲學史的發展の内容自體には充分な考慮が拂われていないという事だけは確かである。彼ほどの考證家もこの點には一言

も觸れていない。こゝに彼がドイツ觀念論哲學の一般的精神的雰圍氣から受けた影響の曖昧さがあるのであつて、そのため例えはジーンモンの如くカントに、フェスターの如くフンボルトに、ブラウンの如くシェリングに、ナルバンディアンの如くフィヒテに、トレルチの如くヘーゲルに、夫々その思想的親近性を指摘するという區々な主張が成り立つのである。^(註)而もその何れもが一面的には云い得ても、何れもが全面的には云い得ぬという理由もそこにあるのである。

ランケはこのように己れの依據する哲學說自體の差異に對して哲學的には充分な批判を加え得ぬまゝにそれらの影響を多面的に受けたわけであるが、それ等カント、フンボルト、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル等の各哲學說が内容上の差異を夫々有するとはいえ少くとも先驗的、觀念論的性格という點では總稱し得るものであつて、それを以てしても彼が同時に他方主張していた方法上のアポステリオリズムとは歴史觀全體の見地から見ればやはり原理的には矛盾するということとは蔽い得ない。しかし彼はその矛盾を矛盾として表面化することなしに一應回避し得たのは、彼が己れの歴史敘述を嚴密な經驗的史料批判主義にのみ基かしたることによるのである。即ちヘーゲルがかの辨證法論理の發展を以て究局的に理性と現實、主觀と客觀、*das Giltige* と *das Geltende* の生成的同一を計り、いわば「ロゴスとしての歴史」*historia rerum gestarum* と「事實としての歴史」*res gestae* の究局的統一を唱導したのに對して、ランケがその分離を留保しつゞけたことによつてである。結局彼は事實(*res gestae*)が記述(*historia rerum gestarum*)を如何に規定するかという問題は原則的に避けてしまつたのである。そして夫々二つの原理をそこに併列させたまゝその關係を規定しなかつたわけである。従つて彼の *res gestae* における先驗的な理念說と *historia rerum gestarum* にお

る後驗的な批判主義がその論理的相關關係においては一種の Indifferentismus に終るものと云うより仕方がない。併し又これによつてこそ彼の經驗史家としての立場は一應保證され得たわけでもある。晩年彼がバヴァリアのマキシミアン二世に進講した際、この學識高き國王から「攝理は各個人の自由な自己決定とは無關係に人類全體に一定の目的を定め、人類はたとえ強制的にはないにしても、その目的に向つて導かれて行くものだということを考えてみてはいけなйдらうか」という極めてカント・フイヒテ的な質問を受けたのに對して、ランケはそれは一つの世界公民主義的な假設であつて「歴史的には實證し得ない」と返答している。⁽³⁸⁾ 又彼自身「人類一般という見地から見ると、歴史的にはただ偉大な民族だけに現われる人類の理念が、次第に全人類を包括して行くべきであつて、これが内的な道德的な進歩というものだらうと思われる」とこれをまた極めてフイヒテ・ヘーゲル的な提題をしておきながら、直ちに語を次いでそれもやはり「歴史はかゝる見方に反對もしないがしかしまた證明もしない」と自答していることはこの Indifferentismus を明らかに物語るものであらう。

しかし又半面この Indifferentismus を以てしては經驗主義の徹底化を志向する近代史學の根柢が歴史哲學的には充分に答えられていないということも認めなければならぬ。而してこの問題が正に現代歴史哲學の切實な關心になつてゐるからには、ランケがその點では解決に遠しとされるのも故ないことではないのであつて、クローチェがランケ史學を「問題なき歴史記述」として棚上げする理由も實はそこにあるのである。クローチェに云わせれば現實的生命と思想との統一を有しないいわゆる「純粹」歴史記述というものは、それを排除することこそ正に歴史哲學のなすべき義務と考へてゐるのであるから、ランケのこの Indifferentismus に對する批判がいきおい嚴しいものになつたのも當然である⁽⁴⁰⁾

う。しかしクロイチェが歴史哲學一般を行動乃至狹義の思想——たとえばイデオロギー——に sine qua non として關係づけてそれを一種の實踐哲學としてのみ定義するとすれば、それ自體極めて一面的解釋であつて、それを以てランケの形而上學的思辨そのものを歴史哲學から排除しようとする⁽⁴¹⁾ことは不當である。「ランケが危険な闘争に導くかもしれない實踐的決定に責任ある努力を致すことを極力回避せんとした」⁽⁴¹⁾からといつて彼を非難することは反つてクロイチェ自身の歴史哲學的立場の偏狹さを證明するばかりで、むしろ危険は彼の方にこそあると云うべきであらう。少くともその點を以てランケの歴史形而上學自體が根柢を奪われる⁽⁴¹⁾という⁽⁴¹⁾ことはあり得ない。しかしランケのこの歴史認識における超越主義が彼の批判的經驗主義と分離しているという問題に關する限りでは、それは少くともラディカルな經驗主義の貫徹を以て歴史の認識と記述の方法を原理的に統一せんとする近代史學の歴史哲學的要請には充分に應え得ないといふことは認めなければならぬ。

三

しかし又問題はそれのみに止らない。ランケの立場が根本的にフンボルト的な觀照主義にあるとすれば、それがいきおい彼の歴史叙述にいけば視點の貴族的精選 aristokratische Auslese をなごしめ、一種の知的・審美的觀照というスタイルを與えしめたのは當然であらう。そしてそれが結局彼の叙述に事件の dynamisch な描寫よりも statisch な鑑賞的描寫が優位を占めるといふことになつて表われ、クロイチェが指摘するように「語らんがため、しかも美しく語らんがために語る⁽⁴²⁾」という一種の耽美的色彩をすら帯びさせ、或は「世界史の Mär」を物語るといふロマンティックな叙

事詩的 Gemüt をすら漂わしめたのである。彼は自己の學問の圓熟期に、歴史は學問であると同時に藝術でもあると洩らしている。⁽⁴³⁾ そのためにディルタイの眼に彼が Epiker として映じたのであろう。兎に角ランケのこの觀照主義はギリシヤ・ラテンの古典ヒューマニズムの精神に深く培われた彼のいわゆる Bildungsgeschichte を辿つてみれば、それが彼の最も内心の欲求であつたことは容易に肯けるであらう。

しかしそれよりもこゝに重大な結果を生んだ問題はこの先驗的理念説に基く觀照主義が政治理念としてのドイツ絶對主義にとつて代わられたということである。即ちトレルチの云うようにランケの「純觀想的な感覺」或は「純粹な世界史に向けられた完全に理論的な瞰觀的なまなざし」は歸するところ「根本的なヨーロッパ主義」 der grundsätzliche Europäismus ⁽⁴⁴⁾ を標榜することになつたということ、而もそれが特に現在ヤスパース等の實存主義的傾向から鋭く指彈される如きいわば一つの完結體としての Totalbild 或は Totalanschauung となつて固定されたといふ點⁽⁴⁵⁾である。即ち彼の「後への展望」に際してその視點が現實に Deutschtum という民族的精神基盤に制約を受けているといふことは彼の意識の中にない。いわばそれは彼にとつて批判の外にあり、無條件的に rechtfertigen されている。彼のうちには一方においてカント的な啓蒙的コスモポリティズムによる文化國家の理想と、フィヒテ的な Normalvolk としてのドイツ民族理念とが固く結びつけられて居り、更に世界精神實現の使命を擔つたゲルマン國家に對するヘーゲル的な自負が高く脈打つて居る。このドイツ・ロマンティクの個性意識から次第に民族的至上意識に昂揚して行つたドイツ理想主義の主觀主義的雰圍氣のうちに彼は成長して行つたのである。 Indifferentismus によつて一應經驗的記述方法と切り離されたこの立場において彼の史的展望の視點に、或は歴史的大勢の傾向規定に、或は指導理念の直觀にこの民族的自觀

主義自體が無批判に混入されるのを彼は殆ど意識しない。しかも又他方、プロテスタント神學の影響は彼の人格の根柢を強く揺り動かして居り、彼の熱烈な正統プロテスタント信仰はルッターの偉業にキリスト救済の世界史的使命を見る立場を固執せしめたのであつた。それが結局「教皇史」や「宗教改革史」の如き神學的觀點の取得が必然的に先行すべき歴史對象を扱うに際して決定的一面性となつて表われたのである。そのためにナルバンディアンも認めているようにランケの歴史記述は宗教や哲學や道德の面においては仲々客觀主義を徹底し得なかつたといふわけであらう。

しかしランケ自身意識的に一つの政治的意圖に基いてそのドイツ民族至上主義を標榜乃至いわゆる理念的基礎付けをしたのでないことは云うまでもない。否反つて彼が時のプロシヤ外相から委囑されてナポレオン政策に抵抗してドイツ保守主義擁護を目的とする *Historisch-politische Zeitschrift* の主幹を引き受けた時も、この雑誌が彼の餘りに學的、客觀的、中立的態度の故に政治的には成功しなかつたといふ事實は何よりも彼の面目を物語るものであらう。しかしそれにも拘らずランケ學派と云われる彼の後繼者達（ジイベル、ワイツ、ギーゼブレヒト、ケプケ、ウィルマンズ、ヒルシュ等）が何れもドイツ國民國家形成の政治上に密接な思想的關係を有しつゝプロシヤ政府の庇護下にランケ史學の精神を實踐的に展開して行つたことは改めてクローチエ等の指摘を俟つまでもない事實である。或はマイネツケの周密な政治史・精神史的な論證によつてランケとビスマルクとが思想内在的に直結して扱われていることもそれを內的に立證するものとはいえないだろうか。ともあれ、あれ程客觀的、中立的な立場を貫こうとしたランケ史學がその後の展開においてこれ程ドイツ民族主義主張の線に即したことは驚くべきことである。しかしそれを以てまた簡単にランケ史學の歪曲或は全面的逸脱といふこともできない。結局それはランケが歴史理念として採つたあの *Idealismus* に淵源し、

この理念のアプリオリズムと歴史記述のアポステリオリズムとを根本的に統一しないまゝに放置した Indifferentismus に直接起因するのであらう。そして彼以後のドイツ史學がやはりその問題を充分に解決しないまゝに繼承して行つたところが、その理念説においてドイツ民族主義の主觀的絶體主義に容易に侵犯されうる隙を與えていたものと云うことができよう。そのことは彼につゞくドロイゼンの場合を見ても同じことが云える。即ちあの優れたアリストテリアンたるトレンデレンブルクとの深い親交からあれ程専門的にアリストテリズムに通じ、それを以て彼の Historik の基本構成となしながらも、その認識論的基礎付けにおいてやはりヘーゲルに反對してフンボルトの理念説を己れの體系のうちになしなげらるゝ——不用意にも——導入する結果となつて、彼も亦このアポステリオリズムとアプリオリズムの矛盾を解決しきらなかつたのである。これを以てみて、このように理論的思考には二義的にしか携わり得ない専門の歴史家にとつて誠に止むを得ないとはいへ、そこに反つて歴然と非合理的な主觀性に傾くドイツ民族精神に育まれた中世「實念論」Realismus 傳統のドイツ思想界にいかにも根深いかを窺い知ることができらるゝであらう。

それだからこそ純粹に經驗的、實證的立場の上に近代歴史學の方法を確立しようとするランプレヒトの努力が、先づランケ史學の克服から出發するといふ皮肉な結果が生じたのである。勿論ランプレヒトの目的は究局において歴史學を法則學にしようとした限り——而も自然科学的方法の一義性を以て——反つて歴史學個有の限界を逸脱したものと云わなければならぬが、しかし彼の意圖が歴史研究において何であれ先驗的な理念による「上から下へ」von oben nach unten の解釋を極力忌避したことは、ランケ派の歴史記述の觀念的獨斷性格を打破すると同時に、近代史學の根柢を再確認せしめるに充分のものではあつた。しかしその非難はランケの後繼者に對してはかなりの程度云い得ても、ラ

ンケ自身に對しては少しく誤解がすぎるといわなければならぬ。彼がランケの歴史認識と記述方法の分離を正當に解していないと見るのは筆者一人の獨斷であらうか。何れにせよランケの場合、止むを得ない時代的制約を除いては、彼の積極的に意圖したところが反つて近代史學の確立を推進する方向にあつたといふことは、いかなる批判に際しても、見誤らるゝはならない。前述せるランケ晩年の言葉「普遍的なものに關係付けることは歴史研究を少しも侵害しない云々」といふことは、この「普遍」といふ概念をいかにとるかに重大な問題がかゝつていたのである。彼自身は勿論それを意識して、觀念的な *Deutschum* に結びつけて考へていたのでなかつたことは繰り返すまでもない。しかし彼の立つ歴史的精神基盤は一途にそれへの道を強力に辿つていた。彼とてもそれを脱することはできなかつた。彼もまた「時代の子」であつたのである。従つて彼の歴史もまた書きかえられる運命を免れることはできなかつた。しかし彼の經驗的方法が歴史理論的にはそれ程徹底し得なかつたとはいへ、少くとも彼の *orientieren* は誤つていない。あの *Indifferenzismus* にしても彼の立つ思想狀況にあつては、彼が己れの歴史家としての立場を守るためになし得た恐らく最大限の策であつたであらう。たしかに彼自身述懐している如く「全體を包括しながらしかも同時に（個別）研究の原則に忠實たらんとすることはもとより一つの理想にとゞまる」⁽⁵⁰⁾ではあらう、それは決して容易ならざる業ではあらう。しかし彼が一經驗史家としてのみ終らず、更にこの問題に大膽に——しかし謙虚な氣品ある態度を以て——一步を踏み出したといふことは、彼が歴史哲學的にも少からぬ貢獻をしたものとして充分に評價されなければならぬ。しかしまたそれだからといつて直ちに近代史學史上における彼の位置付けをそのまま歴史哲學史上の位置に換置することができないといふこともやはり認められなければならない。

(一九五一・一二・一〇)

- 註(1) ヲラゼハルンノハム・シューハルツ・ウーベール Die Epochen der neueren Geschichte の「英文」の訳と村録の序文
(München u. Leipzig, 1921, Vorwort, S. 7)
- (2) G. von Below: Die deutsche Geschichtschreibung von den Befreiungskriegen bis zu unsern Tagen, München u. Berlin, 1924, S. 22 ff.
J. Thyssen: Geschichte der Geschichtsphilosophie, Berlin, 1936, S. 116 ff.
- (3) E. Rothacker: Einleitung in die Geisteswissenschaften, Tübingen, 1930, S. 159.
- (4) O. Lorenz: Die Geschichtswissenschaft in Hauptrichtungen und Aufgaben, 1886. : L. v. Ranke, 1891.
- (5) K. Lamprecht: Alte und neue Richtungen in der Geschichtswissenschaft, Berlin, 1896. : Moderne Geschichtswissenschaft, Berlin, 1905.
- (6) F. Meinecke: Die Entstehung des Historismus, München u. Berlin, 1936, II, S. 632 ff. etc.
W. Dilthey: Vom Anfang des geschichtlichen Bewusstseins; Jugendaufsätze und Erinnerungen (G. S. Band XI), 1936, S. 216 ff.
- 尚、ランプレヒトのこの攻撃に對してはマイネッケ、ディルタイの他、ランツ、マール、レンツ、ヒンツェ、オンケン等ラ
ンケの直系と見られるドイツ歴史派の中軸が一體となつて強力な抵抗線を張つた。哲學の方からリッカートもこれに加擔す
るに及びランプレヒトは殆ど孤立した觀があるが、孤軍奮闘のまま、彼は最後まで自説を枉げなかつた。(上原專祿譯「ラム
プレヒト歴史的思考入門」附録「ラムプレヒトの生涯とその業績」、日本評論社、昭一七、参照)。
- (7) E. Troeltsch: Der Historismus und seine Probleme, Tübingen, 1922, S. 271 ff.
- (8) B. Croce: Die Geschichte als Gedanke und als Tat, (übersetzt von F. Bondy), Bern, 1944, S. 157~158.
- (9) H. F. Helmolt: Leopold Rankes Leben und Wirken, Leipzig, 1921, S. 174.
- (10) Dilthey: G. S. Bd. XI, S. 217.
- (11) H. Oncken: Zur inneren Entwicklung Rankes (Eberhard Gothein Festgabe) S. 199.

- (21) E. Simon : Ranke und Hegel, München u. Berlin, 1928, S. 121.
- (22) L. v. Ranke : Sämmtliche Werke, Band, 53~54. (Zur eigenen Lebensgeschichte) S. 119.
- (23) L. v. Ranke : Epochen d. neu. Geschichte, S. 19.
- (24) Ranke : S. W. Bd. 15 (Englische Geschichte, II), S. 103.
- (25) Dilthey : G. S. Bd. XI, S. 216~217.
- (26) Ranke : S. W. Bd. 33~34 (Geschichten d. rom. u. germ. Völker), Vorrede, VII.
- (27) Ranke : S. W. Bd. 8 (Französische Geschichte, I), VIII.
- (28) Ranke : S. W. Bd. 14 (Englische Geschichte, I), XI.
- (29) Ranke : S. W. Bd. 53~54, S. 168. etc.
- (30) Ranke : Ibid, S. 258.
- (31) Ranke : Weltgeschichte, München u. Leipzig, 1922, S. 4.
- (32) Ranke : S. W. Bd. 53~54, S. 570.
- (33) Ranke : Geschichte und Philosophie (um 1830), (Geschichte u. Politik, Herausgegeben von H. Hofmann, Kröner Ausg.) S. 136~137. ルンペル著 Epochen の Vorwort の 中 に 著 録 さ れ て いる (S. 5)
- (34) Simon : Ranke u. Hegel, S. 127.
- (35) “Wo aus der Tendenz eine Methode wird, d. h. wo die Dialektik sich nicht benügt, nachträgliches Deutungsprinzip zu sein, sondern wo sie sich annasst, als heuristisches Forschungsprinzip zu fungieren, da setzt Ranke ihr Niebhurs und die eigene kritische Methode entgegen.” (Simon : Ranke u. Hegel, S. 170)
- (36) W. v. Humboldt : Ueber die Aufgabe des Geschichtschreibers. (Kleine Schriften, Reclam Ausg.) S. 143 u. S. 158.
 筆者は「ランケがフンボルトの當時問題のこの小論文を認めて讀んでいざやあんなに推測をなすヘムターの説に據りて」彼の史觀のよがに引き入れた」といふのである (R. Fester : Humboldt's und Ranke's Ideenlehre, Deutsche Zeitschrift)

für Geschichtswissenschaft, Leipzig, 1891, Bd. VI.) のフェスターの推測はかなりの信憑性があると思うが、それでも若し外れているとすれば偶然の意見の一致というより仕方がない。しかしとに角ゲルウイヌスやドロイゼンと違ってランケには確かに讀んだという彼自身の告白が見られないのだが、それが見られなくても内容的には疑いもなく一致しているところだけは普く認められたらなる。

Ranke: S. W. Bd. 53~54, S. 570. その一例として擧げよう。

(38) Ranke: Epochen d. n. G., Vorwort, S. 5.

(39) Ranke: Allgemeine Bemerkungen, 1831~49, S. W. Bd. 53~54, S. 569 ff.

(30) 一例だけを擧げよう。

“Dürfen wir sagen, dass das Reich durch diese Entwicklung seine eigene Notwendigkeit aufhob? Das Menschengeschlecht war nummehr seiner selbst innegeworden: es hatte seine Einheit in der Religion gefunden.” (Die römischen Päpste, I, S. W. Bd. 37, S. 10)

尙他に Päpste, I, S. 139, S. 171: II, S. W. Bd. 38, S. 178, S. 359: Deutsche Geschichte, V, S. W. Bd. 5, S. 361 等とあつて數多類似例を列擧し得るが、詳細はジーマンの研究書に委ねよう (Simon: Ranke u. Hegel, S. 168 ff.)。

(31) Troeltsch: Historismus u. s. Probleme, S. 272.

(32) Troeltsch: Ibid., S. 272.

「ヘーゲルの理論がランケに強く影響を與えてはいるが、恐らくヘーゲル理論の根源的な形式においてよりは、むしろ當時ヘルリンの空氣において見出されたあの普及と膾炙の方がより多くの影響を與えたであろう」とジーマンも云つてゐる (Simon: Ibid., S. 169)。「ヘルリン大學史」はそれをもつと具體的に見せてくれる。

或は「ドイツ史學が世界に歴史的思惟(辨證法的思惟)を教えてくれたということを彼等(英佛人)はヘーゲル自身にではなくとも彼の時代に感謝するのだ。何故ならヘーゲルはたゞこの時代の精髓を體系化し、合理化せんとしただけなのであるから」(Troeltsch: Ibid., S. 271)と云われる如く、當時の時代精神一般の方に作用の主體を認めて、ヘーゲルもランケも共

にそれから影響を受け、彼等なりにそれを受けとつたというようにも考えられないことはない。

- (33) Troeltsch: *Ibid.*, S. 271.
- (34) Simon: *Ranke u. Hegel*, S. 182.
- (35) Troeltsch: *Ibid.*, S. 271.
- (36) トロELTSCHは「フンボルトとかなり似たところが見られるが、やはりヘーゲルの統一努力の方が優つてゐる」と云つてゐる。(Troeltsch: *Ibid.*, S. 272.)
- (37) Simon: *Ibid.*, S. 126~127.
R. Fester: *Humboldt's u. Ranke's Ideenlehre*. (Deuts. Zeitsch. für Geschichtswiss., Leipzig, 1891, Bd. VI).
O. Braun: *Geschichtsphilosophie*, Leipzig, 1921, S. 53.
W. Nalbandian: *L. v. Ranke's Bildungsjahre und Geschichtsauffassung*, Leipzig, 1902, S. 43 ff.
Troeltsch: *Ibid.*, S. 272.
- (38) Ranke: *Epochen*, S. 19.
- (39) *Ibid.*
- (40) Croce: *Geschichte als Gedanke und als Tat*, S. 157.
- (41) *Ibid.*, S. 156.
- (42) *Ibid.*, S. 158.
- (43) “Die Historie ist zugleich Kunst und Wissenschaft.” (Ranke: *S. W. Bd. 12* <Franz. Geschichte, V> S. 5.)
- (44) Troeltsch: *Ibid.*, S. 272.
- (45) ヤス・パースによればこう考えられている。「歴史に向うものは誰でも歴史の全體を統一する全體觀を心ならずもつくり上げてしまふ。これは批判されないもの、否、意識もされないのだから問われもしないものである。歴史的な考え方をする際にはこの全體觀は自明なものとしていつも前提されているわけである」。そして「我々は個々の經驗的史實を見る時、それが

この統一理念にどこまで一致しているか、或はどこまで反しているかという点において考察するのである。しかしまたこのような全體觀 *universale Anschauung* 乃至統一理念 *Einheitsidee* というものは一つの「完結體」として歴史そのものではない。何故なら歴史は本來いかなる本質的規定としての全體觀 (*Wessein*) によつても捉えられぬ眞に實存的なもの (*Dasein*)、無完結な事象だからである。然るにその把握にこのような統一理念を要請するとすれば、歴史は必然的に歴史ならざるものを前提としなければならぬというジレンマに陥るわけである。だから人類は昔から幾つも全體像をつくつては壊しつくつては壊して來た。それがまさに歴史の歩みなのであつて、究局の單一像を得るまで止むことがない。ランケの世界史も、それが一つの過渡的な全體像としての「ヨーロッパ主義」に固定され完結された瞬間「歴史」でなくなつたわけである。このようなヤスパースの批判はたしかにランケ史觀の一面を衝いてはいるのみならず、歴史哲學の本質問題に觸れる。(Cf. K. Jaspers: *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, München, 1950, S. 15~18 u. 329 ff.)

- (46) Nalbandian: *L. v. Ranke's Bildungsjahre und Geschichtsauffassung*, S. 92 ff.
- (47) Croce: *Ibid.*, S. 157.
- (48) Meinecke: *Weltbürgertum und Nationalstaat*, München u. Berlin, 1928, S. 287 ff.
- (49) 註(5)参照。
- (50) Ranke: *Epochen*, S. 7.

〈附記〉

尙、本稿作成に當つては故船田三郎名譽教授が生前筆者に直接賜つた指導と、本誌上にかつて執筆された左記三論文に極めて多くを負うてゐることを特に附記して、故師の靈に改めて謝意を捧げたい。

「Leopold v. Ranke の歴史認識の一面に就いて」(四ノ四)

「ランケの歴史研究の方法とその根柢にあるもの」(一五ノ四)

「フンボルトの歴史的理念説」(一一ノ四)